

パネルディスカッション②：長嶺氏

「高知県グローバル教育シンポジウム」 パネルディスカッション

テーマ 「国際的な視点をもって地域や国際社会で活躍できる人材とは
～生涯学び続ける力を育む国際バカロレア～」

・パネラー

長谷川壽一氏（東京大学大学院総合文化研究科教授）

田宮 直彦氏（株式会社日立製作所人財統括本部人事勤労本部長）

松木 秀彰氏（文部科学省大臣官房国際課国際協力企画室長）

石筒 覚氏（高知大学地域協働学部准教授）

長嶺沙綾子氏（IBDP 卒業生・サンディスク株式会社勤務）

・コーディネーター

坪谷ニューエル郁子氏（国際バカロレア機構アジア太平洋地区委員）

（司会）

では続きまして、その国際バカロレアで学ばれました卒業生の長嶺様。国際バカロレアの授業についてご紹介をいただきたいと思います。お願いします。

（長嶺沙綾子氏）

皆様はじめまして、長嶺沙綾子と申します。

10年ぐらい前の話になってしまうんですけども、私がイギリスのロンドンで実際に体験したIBについてお話させていただきたいと思います。

まず最初に、簡単に私のプロフィールを紹介させていただきたいと思うんですけども（資料p2）、私は1998年、中学2年生のときに、インドのアメリカンスクールに父の仕事の関係で転校しました。こちらの学校で英語環境の中で勉強を始めたんですけども、こちらのアメリカンスクールではアメリカのシステムであるAP（Advanced Placement）と、後は国際バカロレアの両方のコースを持っていました。ただ私は、そちらのIBに進む前に高校1年のときに今度はイギリスのロンドンの方に引っ越しまして、そちらのサウスバンク・インターナショナル・スクールという学校に転校することになりました。そこでIBのフル・ディプロマ（全ての科目を合格）を取得しまして、最終的にはIBのスコア42点というのをいただきまして、この成績をもってイギリスのオックスフォード大学に入学いたしました。

大学では物理を勉強しまして、修士課程を終了後、日本に戻ってきてサンディスク株式会社、SDカードですとか、スマートフォンの中のメモリとかを作っている会社で、多分皆さんも使っていただいていると思うんですけども、こちらを作っている会社で開発部門のエンジニアとして現在働いております。

こちらが（資料p3）、私が実際にIBをやっていたときに選択した教科にな

ります。日本語、外国語として英語、それから、社会科系の教科としては ITGS (Information Technology in Global Society) と書いてありますけど、これは情報テクノロジーとグローバル社会という科目になります。それから、理系で物理、数学、そして6つの教科として化学を選択しています。

IB を始める時点では、最初から理系に進もうと思っていたので、このようかなり理系に特化した形で教科を選択してあります。また、IB では、各教科に「スタンダードレベル」と「ハイヤーレベル」という2つのレベルが存在するんですけども、物理と数学と科学をハイヤーレベルで取ることにいたしました。ハイヤーレベルとスタンダードレベルという2つの段階で選べるので、苦手な教科があったとしても、そちらをスタンダードにしておけば、それほどハードにはならず授業についていけるというような印象を持っています。

簡単に各教科について説明させていただきます。母国語としての日本語の授業なんですけれども、こちらには教科書みたいなものは存在せずに、2年間で10冊以上の日本文学ですとか、外国文学の小説を読んで、そちらのほうで小論文を書いたりとか。後は、散文や韻文などの短い文章を読んでコメンタリー、こちらは「解説文」を書いたりというようなことを授業中に行っています。また、英語に関しても、同様に小説を読んだり、新聞記事や雑誌の記事などを読んで時事ネタを元にして、生徒同士でディスカッションをするというようなこともよく行ったように記憶しております。

3番目の ITGS、これは IT の仕組みについて勉強したり、あと IT が私たちの社会に与える影響を倫理的な側面も踏まえて勉強するような科目になっています。例えば、この ITGS という教科で、ディスカッションされたテーマの一つとしましては、例えば、コンピューターゲームを子どもにさせることによって、どういう良い影響と悪い影響があるのかとか、そういったちょっと面白い内容で授業をしたことを覚えています。以上が、文系の教科なんですけれども、これらはディスカッションを多くすることもありまして、教室の正面に先生が立って、黒板があって、みんな机に座って正面を向いてやるような形式ではなく、コの字型に机を固めて、生徒同士で自由に意見が交換できるような環境で授業を行っていました。

さて、理系の教科なんですけれども、物理や化学などは論文などは書かないんですけども、代わりに実験のレポートという形で、きちんと書いたものを IB の方に提出する必要がありました。また、こちらの方の最終試験では、試験会場に電卓ですとか、IB の方が提供する公式の数式が載っている、公式な小冊子を与えられていまして、こちらを試験中に見て問題を解くことができていました。ですので、IB の数学とか物理とかでは、数式を全部覚えこんで解くということよりも、自分で考えて、ちゃんと問題を考えて応用して解く力という方に重きが置かれていたように思っています。

これらが6つの基本的な教科です。真ん中に書いてありますのが(資料 p 3)、先ほど坪谷さんの方からお話のありましたコアの部分、CAS (Creativity・Action・Service) と EE (Extended Essay) と TOK (Theory of Knowledge) に

なります。

CAS に関しましては、私は海外の学校だったので、外国の小学生ぐらいの子どもたちに折り紙を教えるという活動をしていまして、週1回放課後の時間に折り紙クラブというものを作り、小さい子に、鶴とか箱の作り方とかそういうものを教えてCASの活動としていました。

EEは、日本語で8,000字書かなくてはいけなくて、400字詰め原稿用紙ですとぎっしり書いて20枚、それ以上必要になってきて、非常に今までそんな量の文章を書いたことがないというほど結構長いものなんですけれども、学校の先生がちゃんと面倒を見てくださいますので、期日を守ってやれば、時間に余裕を持って問題なく終了できるようなものでした。

最後のTOK、こちらがとてもIBにおいてユニークなところなんですけれども、こちらに関してましては、また後ほど詳細にお話することができますと思います。

イギリスでは(資料p4)、先ほどお話がありましたように、IBの点数がそのまま入試になりますので、塾とかそういうのに通う必要はなく、純粹にIBの勉強に取り組んでいて、優秀な成績を残すことができれば大学の方には、そんなに苦勞、なんて言うんですかね。私は日本の受験をやったことがないのでちょっと比べようがないんですけども、日本の受験のように、学校の授業もやって、塾にも行ってというそういう二重の苦勞というのはなかったように覚えています。

IBの進捗と受験に関しましては、私の学校にIBのコーディネーターの先生がいらっしゃいまして、その方が一人ひとりの生徒の進捗を見て、アドバイスを適切なときにくださったので、非常に安心してお任せすることができました。

IBというのは、授業の課題や、後はIBに提出しなければいけない課題、それから試験のための過去問の勉強など、非常にストレスが多いんですけども、この6つの教科を選んで、またCAS、EE、TOKなどといった人間を深める感じの授業をとれたことによって、非常に私もIBをやったと思っています。

以上になります。

(司会)

ありがとうございました。

国際バカロレアのことを、少し具体的なお話もしていただけましたので、理解が進んだのではないかというふうに思います。

では、また次の準備をさせていただきます。